

神戸大学におけるディプロマ・ポリシーの現状と課題

Current Status and Issues of Diploma Policy at Kobe University

葛城 浩一 (神戸大学 大学教育推進機構 准教授)

要旨

本稿では、教学 IR の一環として、神戸大学におけるディプロマ・ポリシー (以下、DP) の現状と課題について、データに基づき明らかにした。具体的には、各学部が定める DP (以下、学部の DP)、各学部のカリキュラム・マップ (以下、CM)、教育成果を問う評価項目という 3 つの観点からアプローチすることを通じてその現状を明らかにするとともに、神戸大学における DP の今後のあり方について考える上での課題を明らかにした。本稿で明らかにされた課題は以下の 4 点である。すなわち、(1) DP の構成要素は大きく見直す必要があること、(2) 全学の DP と学部の DP との関係性のあり方を大きく見直す必要があること、(3) 全学、学部問わず、DP で定めた能力を身につけさせるべく、特に CM を大きく見直す必要があること、(4) 全学、学部問わず、DP で定めた能力をどのように評価するか、その評価方法について直接評価も視野に検討する必要があること、である。

1. はじめに

ディプロマ・ポリシー (卒業認定・学位授与の方針、以下、DP) とは、「各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの」(中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2016) のことである。カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針、以下、CP)、アドミッション・ポリシー (入学者受け入れの方針) とともに、3 つのポリシーと呼ばれ、各大学における教育改革を実現する上での指針として極めて重要な役割を担うものとされている。このうち、CP が「DP の達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針」(同上、下線は筆者による) であり、AP が「各大学、学部・学科等の教育理念、DP、CP に基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針 (後略)」(同上、下線は筆者による) であることに鑑みれば、DP がこそが教育改革を実現する上でのもっとも重要な指針であるといえよう。そうした DP の重要性は、大学関係者には建前としては認識されているだろうが、本音の部分では「お題目」として捉えられているからか、策定されている DP が「教育改革を実現する上でのもっとも重要な指針」として機能していない大学も少なくない。

それでは神戸大学 (以下、本学) における DP はいかなる現状にあり、どのような課題

を抱えているのだろうか。こうした点については、特に教務関係者にはその課題がなんとなく認識されているのだろうが、データに基づく丁寧な検討が行われた形跡は見当たらない。データに基づく教学マネジメントを進めようとしている本学において、大学における教育改革を実現する上でのもっとも重要な指針である DP の現状と課題について、データに基づき明らかにすることは、まずもって取り組まなければならない重要案件であろう。

そこで本稿では、教学 IR の一環として、本学における DP の現状と課題についてデータに基づき明らかにしたい。具体的には、各学部が定める DP (以下、学部の DP)、各学部のカリキュラム・マップ (CP を可視化したもの、以下、CM)、教育成果を問う評価項目という3つの観点からアプローチすることを通じてその現状を明らかにするとともに、本学における DP の今後のあり方について考える上での課題を明らかにしたいと考える。

2. 各学部の DP の現状分析

本学の DP は、「人間性」、「創造性」、「国際性」、「専門性」をその構成要素としている。このうち、「人間性」、「創造性」、「国際性」については身につけるべき能力がそれぞれ2つずつ明記されているのに対し、「専門性」についてはそれがなく、「それぞれの課程で身につける専門的能力は各学部・研究科が定める」と明記されている。このことに鑑みれば、「人間性」、「創造性」、「国際性」については、学部を問わず定める DP (以下、全学の DP) において、「専門性」については各学部の DP において、身につけるべき能力を定めるという構造になっているようである。しかし実際には、各学部の DP は「専門性」を基本としつつ、「人間性」、「創造性」、「国際性」をオプションで取り入れている。その点について、(本学の) DP の構成要素と各学部の DP との対応から確認していきたい。

表1は、各学部の DP の項目が DP の構成要素のいずれに対応しているかを、筆者が判断し、整理したものである(海事科学部は令和3年度で学生募集を停止しているため分析対象から除外)。対応することが明らかなものには「◎」を、対応すると見受けられるものには「○」の記号を付している。なお、後者の判断については、筆者の恣意的な判断となることを極力避けるため、DP の構成要素の説明文及び全学の DP で定める能力に含まれる以下のキーワードを含むかどうかをその基準としている。

- ・人間性：人間性、教養、倫理、協働
- ・創造性：創造性、課題(あるいは問題) (+解決) +創造、新たな発想
- ・国際性：国際性、コミュニケーション

この表からわかるように、各学部の DP はいくつかのタイプに分類することができる。すなわち、(1)「専門性」のみ定めているタイプ(経済学部)、(2)「専門性」に加え、いずれかの構成要素についても定めているタイプ(国際人間科学部、法学部、経営学部、理学

部、工学部、農学部、海洋政策科学部)、(3)「専門性」を含む、すべての構成要素について定めているタイプ(文学部、医学部医学科、医学部保健学科)である。このように、本学の DP は各学部による自由度が非常に高いという点に大きな特徴がある。以下、タイプごとに各学部の DP の特徴についてみていこう。

表1 DPの構成要素と各学部のDPとの対応

		専門性	人間性	創造性	国際性	
文学部		◎	◎	◎	◎	
国際人間科学部	グローバル文化学科	◎	○		○	
	発達コミュニティ学科	◎	○		○	
	環境共生学科	◎	○		○	
	子ども教育学科	◎	○		○	
	学士(学術)	◎	○		○	
	学士(教育学)	◎	○		○	
法学部		◎		○		
経済学部		◎				
経営学部	学士(経営学)	◎	○		○	
	学士(商学)	◎	○		○	
理学部	数学科	◎		○		
	物理学科	◎		○		
	化学科	◎		○		
	生物学科	◎		○		
	惑星学科	◎		○		
医学部	医学科	◎	○	○	◎	
医学部	保健学科	看護学専攻	◎	◎	◎	◎
		検査技術科学専攻	◎	◎	◎	◎
		理学療法学専攻	◎	◎	◎	◎
		作業療法学専攻	◎	◎	◎	◎
工学部	建築学科	◎				
	市民工学科	◎	○		○	
	電気電子工学科	◎		○		
	機械工学科	◎				
	応用化学科	◎	○			
	情報知能工学科	◎		○		
農学部	食料環境システム学科	生産環境工学コース	◎	○		
		食料環境経済学コース	◎	○		
	資源生命科学科	応用動物学コース	◎	○		
		応用植物学コース	◎	○		
	生命機能科学科	応用生命化学コース	◎	○		
		応用機能生物学コース	◎	○		
海洋政策科学部	海洋政策科学科	◎	○		○	
	海洋政策科学科	◎	○		○	
	ライセンスコース	◎	○		○	

2.1 「専門性」のみ定めているタイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、経済学部のみである。経済学部の DP の特徴は、そのシンプルさにある。以下に示すのは、経済学部が定めた DP である。他の学部のように、学科等の下位分類によって異なる DP を設定しておらず、「専門性」に特化した、極めてシンプルな単層構造の DP であることがわかるだろう。

- ・論理的・数理的に思考する能力
- ・社会において生じている事象を的確に分析し、その事象を解明できる能力
- ・分析、解明したことを総合し、的確に表現できる能力

2.2 「専門性」に加え、いずれかの構成要素についても定めているタイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、国際人間科学部、法学部、経営学部、理学部、工学部、農学部、海洋政策科学部と非常に多い。しかし、その構造という点に着目すると、大きく2つに分類することができる。すなわち、学部共通あるいは学科共通で定めた DP から構成される単層構造のもの（法学部、工学部、農学部）、学部共通で定めた DP と学科等ごとに定めた DP から構成される二層構造のもの（国際人間科学部、経営学部、理学部、海洋政策科学部）に分類されよう。以下、その分類ごとに各学部の DP の特徴についてみていこう。

2.2.1 単層構造のもの

この分類に該当するのは、先述のように、法学部、工学部、農学部である。同じ分類ではあるがその構成は大きく異なるため、以下、法学部、農学部、工学部の順にみていこう。

(1) 法学部

法学部の DP の特徴は、先述の経済学部と同様、学部共通で定めた DP のみの単層構造になっているという点にある。以下に示すのは、法学部が定めた DP である。このうち、4 点目が「創造性」と関連性のある項目と見受けられる。

- ・法学に関する幅広い知識とこれを基盤とした専門的能力
- ・政治学に関する幅広い知識とこれを基盤とした専門的能力
- ・多様な価値観を尊重し、法的・政治的領域の課題を適切に把握する能力
- ・問題解決のために、幅広い思考により新たな発想を生み出す能力

(2) 農学部

農学部の DP の特徴は、学部共通で定めた DP がなく、学科共通で定めた DP のみ（4 項目）の単層構造になっているものの、学部共通のフォーマットで構成されているため統一性が高いという点にある。以下に示すのは、農学部が定めたフォーマットである。このうち、2 点目が「人間性」と関連性のある項目と見受けられる。

- ・食や農に関わる〇〇分野の基盤となる知識を体系的に理解・応用することができる。
- ・高い倫理観と使命感をもって、食や農に関わる〇〇分野の研究を批判的に検討し、課

題を適切に設定することができる。

- ・食や農に関わる〇〇分野の〇〇にもとづき、〇〇を行い、〇〇ことができる。
- ・食や農に関わる〇〇分野の〇〇を、社会的課題の解決策として活用することができる。

(3) 工学部

工学部の DP の特徴は、学部共通で定めた DP がなく、学科共通で定めた DP のみの単層構造になっており、先述の農学部のように、学部共通のフォーマットで構成されているわけでもないという点にある。しかも学科によって 4~8 項目と、項目数でも多様性に富んでいる。以下に示すのは、工学部の各学科が定めた DP のうち、DP の構成要素と関連性のある項目と見受けられるものである。

人間性

- ・多面的思考・技術者倫理に関する能力（市民工学科）
- ・応用化学的な知識に基づく高い倫理性と豊かな人間性（応用化学科）

創造性

- ・電気電子工学に関する知識を用いて、創造的に思考し、課題解決に取り組む能力（電気電子工学科）
- ・広い視点から課題にアプローチするための応用力・創造的な能力（情報智能工学科）

国際性

- ・コミュニケーションに関する能力（市民工学科）

2.2.2 二層構造のもの

この分類に該当するのは、先述のように、国際人間科学部、経営学部、理学部、海洋政策科学部である。こちらの構成は比較的似通っている。以下、この順にみていこう。

(1) 経営学部

経営学部の DP は、学部共通で定めた DP が 2 項目と、学位ごとに定めた DP が 1 項目の二層構造になっている。以下に示すのは、経営学部が学部共通で定めた DP である。このうち、1 点目が「人間性」、2 点目が「国際性」と関連性のある項目と見受けられる。なお、学位ごとに定めた DP は「専門性」に対応するものである。

- ・企業に代表される組織とそれを取り巻く社会や環境との相互依存関係の本質を理解できるような、豊かな一般教養と高い倫理性
- ・経営に関する自分自身の考えを、国内だけでなく海外の人々にも適切に伝えることができる表現力およびコミュニケーション力

(2) 理学部

理学部の DP は、学部共通で定めた DP が 2 項目と、学科ごとに定めた DP が 3～4 項目の二層構造になっている。以下に示すのは、理学部が学部共通で定めた DP である。このうち、2 点目が「創造性」と関連性のある項目と見受けられる。なお、学位ごとに定めた DP は「専門性」に対応するものである。

- ・ 科学全般を俯瞰する能力
- ・ 自ら課題を設定し、課題を創造的に解決する能力

(3) 国際人間科学部

国際人間科学部の DP は、学部共通で定めた DP が 3 項目と、学科ごとに定めた DP が 2～3 項目の二層構造になっている¹。以下に示すのは、国際人間科学部が学部共通で定めた DP である。このうち、2 点目が「国際性」、3 点目が「人間性」と関連性のある項目と見受けられる。なお、学科ごとに定めた DP は、先述の農学部のように、学部共通のフォーマットで構成されているが、いずれも「専門性」に対応するものと見受けられる。

- ・ グローバルイシューを構成する諸課題を発見する批判的・合理的思考力
- ・ 外国語や ICT を使いこなす多様なコミュニケーション能力と情報収集・分析能力
- ・ グローバルイシューの解決に向けて、他者と協働しつつ、リーダーシップを発揮する行動力

(4) 海洋政策科学部

海洋政策科学部の DP は、学部共通で定めた DP が 3 項目と、学科ごとに定めた DP が 1 項目の二層構造になっている。以下に示すのは、海洋政策科学部が学部共通で定めた DP である。このうち、1 点目が「国際性」、2 点目が「人間性」と関連性のある項目と見受けられる。なお、学科ごとに定めた DP は「専門性」に対応するものである。

- ・ 海洋に関する教養²的知識、語学力（英語）とそれらに基づくコミュニケーション能力
- ・ 海洋を巡る国際秩序の安定化や海洋開発・海洋産業の発展・振興のために主体性・協働性を持って取り組み、貢献する能力
- ・ 修得した知識・技能を総合的に活用し、海洋分野の諸課題の発見や解決を図るための柔軟な思考力と対応能力

¹ 正確には、子ども教育学科では学位ごとに DP を定めているので三層構造である。

² 「海洋に関する教養」であるため、一般的な「教養」とは異なると判断した。

2.3 すべての構成要素について定めているタイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、文学部、医学部医学科、医学部保健学科である。それぞれ特徴があるので、以下、文学部、医学部保健学科、医学部医学科の順にみていこう。

(1) 文学部

文学部の DP の特徴は、DP の構成要素を示した上で、そこに位置づけられる DP を提示している点にある。以下に示すのは、文学部が定めた DP のうち「専門性」(4 項目)を除いたものである。なお、「創造性」に位置づけられている DP は、本稿の判断基準では、「創造性」に対応する項目とみなされなかったことには留意されたい。なお、本稿の判断基準と対応しないという点では、後述の医学部保健学科も同様である。

「人間性」

- ・人文学に関わる課題について自ら主体的に学び、協働して解決することができる能力

「創造性」

- ・人文学の意義と重要性を理解し、複眼的に思考することで、人文学の発展に貢献することができる能力

「国際性」

- ・異なる文化によって育まれた多様性を理解・受容し、必要な外国語でコミュニケーションをはかる能力

(2) 医学部保健学科

医学部保健学科の DP の特徴は、DP の構成要素とは異なるもののそれとの対応がわかりやすい別のカテゴリを示した上で、そこに位置づけられる DP を提示しているという点にある。なお、そのカテゴリのもとにある DP は専攻によって異なっている。以下に示すのは、医学部看護学科が定めた DP の一部である。このうち「創造性」はそのまま「創造性」に対応するカテゴリであろうし、「人間性と倫理性」は「人間性」、「地域性・国際性」は「国際性」と対応するカテゴリであろう。残る「専門性と協働」は、「専門性」に対応するカテゴリであるとともに、「協働」とあることから「人間性」と関連性のあるカテゴリであると見受けられる。

「人間性と倫理性」

- ・豊かな人間性と教養を持ち、保健医療における高い倫理性、柔軟性、協調性、当事者性を身につけた看護専門職者となるための基礎的能力。ほか 1 項目

「創造性」

- ・論理的に事象を解釈し、ケアリングの視点を持ち、よりよいケアを創造する能力。

ほか1項目

「地域性・国際性」

- ・多様な文化・価値観を尊重し、地域・国際社会で活躍する基礎的能力。ほか1項目

「専門性と協働」

- ・医療の基礎学力と専門知識を習得した看護専門職者として、保健医療福祉チームにおいて協働する能力。ほか2項目

(3) 医学部医学科

医学部医学科のDPの特徴は、DPの構成要素とは異なる別のカテゴリを示した上で、そこに位置づけられるDPを提示している点にある。以下に示すのは、医学部医学科が定めたDPである。先述の保健学科ほどDPの構成要素との対応は明確ではないが、DPの内容までみていけば対応関係を読み取ることは可能である。すなわち、「VII. 国際性」はそのまま「国際性」に対応するカテゴリであろうし、「IV. 倫理観」、「VI. リーダーシップ」は「人間性」、「II. 科学的探究心」は「創造性」と関連性があるカテゴリと見受けられる。なお、「III. 知識と技能」は「専門性」に対応するものであるが、残る「I. 礼儀・態度」と「V. 向上心」は、本稿の判断基準ではいずれの構成要素とも関連性があるカテゴリとされないものの、内容的にみれば「人間性」と関連性があるカテゴリのようにも見受けられる。

I. 礼儀・態度

- ・患者や医療従事者等に対して良好な人間関係を構築することができる。

II. 科学的探究心

- ・生命科学に対する探究心と感性をもち、科学的思考能力と創造性をそなえている。

III. 知識と技能

- ・基礎と臨床のバランスのとれた知識をもち、的確な臨床推理能力を有している。
- ・病態を理解し、それに即した基本的技能を修得している。

IV. 倫理観

- ・確固とした倫理観をもちつつ、周囲との連携の中で自己を変革し続けることができる。

V. 向上心

- ・自ら目標を設定し、課題を抽出し、解決に向けた取り組みができる。
- ・長期的な展望にたち、有為の人材たらしめる気概をもっている。

VI. リーダーシップ

- ・多様性を受容できる人間性をもち、リーダーシップを発揮して地域社会に貢献できる。

VII. 国際性

- ・ 広範な情報を収集・分析することができ、適切な議論ができる語学力と国際性を身につけている。

2.4 小括

以上、DPの構成要素と各学部のDPとの対応について確認してきた。ここで改めて指摘しておきたいのは、本学のDPは各学部による自由度が非常に高いという問題である。その自由度の高さゆえ、DPの構成要素と各学部のDPとの対応関係を把握することすら容易ではなく、先述のように一定の基準に基づき第三者が判断したとしても、別の基準に基づけば別の判断となる可能性がある。DPが社会に対する「約束事」として示される性格のものである以上、第三者にもわかりやすく誤解のないDPとすることは、今後のDPのあり方について考える際にまずもって重要なポイントであると考えられる。

3. 各学部のCMの現状分析

冒頭で述べたように、CPとは、「DPの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針」であり、DPとCPには一体性・整合性が強く求められる。そこで本節では、CPを可視化したCMに着目することでみてくる、本学におけるDPの現状と課題について明らかにしたいと考える。

3.1 DPの構成要素と各学部のCMとの対応

各学部のCMには、DPの構成要素のそれぞれに対応する科目（群）名が記載されている。表2は、DPの構成要素のそれぞれに対応する学部専門科目（以下、専門科目）があるか、各学部のCMに基づき整理したものである。対応する専門科目があるものには「◎」を、対応する専門科目が「初年次セミナー」のみのもの³には「○」を、対応する科目が「高度教養科目」のみのものには「△」を付している。なお、「初年次セミナー」のみのものに「○」を付しているのは、全学共通の教材を用いているという当該科目の特殊性から、他の学部専門科目とはやや性格が異なる科目と判断したからである。また、「高度教養科目」のみのものに「△」を付しているのは、「高度教養科目」という情報だけでは、当該学部が開講する専門科目としての位置づけにある科目なのか判断がつかないからである。なお、表1との対応がわかるように、表1において「◎」か「○」が付された部分には網掛けを施している。

この表（の網掛け）からわかるように、記号の有無と網掛けの有無とは必ずしも一致し

³ ただし、対応する専門科目が「初年次セミナー」だけでなく、「高度教養科目」である場合にも「○」を付している。

ているわけではない。すなわち、(記号の有無が示す) CMに基づき整理した、DPの構成要素と各学部のCMの記載内容との対応関係(以下、「CMに基づく整理」と、(網掛けの有無が示す)一定の基準に基づき第三者(筆者)が判断した、DPの構成要素と各学部のDPの記載内容との対応関係(以下、「第三者の判断」とは必ずしも一致しているわけではないということである。その一致、不一致のありようは3つのタイプに分類することができる。すなわち、DPの構成要素との対応関係について、(1)「CMに基づく整理」と「第三者の判断」が一致しているタイプ(経営学部、医学部医学科、医学部保健学科、海洋政策科学部)、(2)「CMに基づく整理」では「ある」が、「第三者の判断」では「ない」タイプ(法学部、経済学部、理学部、工学部、農学部)、(3)「CMに基づく整理」では「ない」が、「第三者の判断」では「ある」タイプ(文学部、国際人間科学部、理学部)、である。

表2 DPの構成要素と各学部のCMとの対応

		専門性	人間性	創造性	国際性	
文学部		◎	○			
国際人間科学部	グローバル文化学科	◎	○			
	発達コミュニティ学科	◎	○			
	環境共生学科	◎	○			
	子ども教育学科	学士(学術)	◎	○		
学士(教育学)		◎	○			
法学部		◎	◎	◎	◎	
経済学部		◎	◎	◎	◎	
経営学部	学士(経営学)	◎	○		△	
	学士(商学)	◎	○		△	
理学部	数学科	◎	△			
	物理学科	◎	△			
	化学科	◎	△			
	生物学科	◎	○			
	惑星学科	◎	△			
医学部	医学科	◎	◎	◎	◎	
医学部	保健学科	看護学専攻	◎	◎	◎	◎
		検査技術科学専攻	◎	◎	◎	◎
		理学療法学専攻	◎	◎	◎	◎
		作業療法学専攻	◎	◎	◎	◎
工学部	建築学科	◎	◎	◎	◎	
	市民工学科	◎	◎	◎	◎	
	電気電子工学科	◎	◎	◎	◎	
	機械工学科	◎	◎	◎	◎	
	応用化学科	◎	◎	◎	◎	
	情報知能工学科	◎	○		◎	
農学部	食料環境システム学科	生産環境工学コース	◎	○		◎
		食料環境経済学コース	◎	○		◎
	資源生命科学科	応用動物学コース	◎	○		◎
		応用植物学コース	◎	○		◎
	生命機能科学科	応用生命化学コース	◎	○		◎
		応用機能生物学コース	◎	○		◎
海洋政策科学部	海洋政策科学科	◎	◎		◎	
	海洋政策科学科	◎	◎		◎	

ここで確認しておきたいのは、一定の基準に基づき筆者が判断した、DPの構成要素と各学部のDPの記載内容との対応関係は、各学部が考える両者の対応関係と同じであるとは限らないという点である（前節の文学部を参照）。また、「専門性」を除く構成要素について、仮に各学部のDPでは定めていなかったとしても、全学のDPで定める能力を、専門科目で（さらに）身につけさせたいと考えている可能性も十分にある。こうした点に十分留意した上で、以下、上記のタイプごとに各学部の特徴についてみていこう。

3.1.1 「CMに基づく整理」と「第三者の判断」が一致しているタイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、経営学部、医学部医学科、医学部保健学科、海洋政策科学部である。このうち、医学部医学科と医学部保健学科では、DPの構成要素のすべてに対応する学部のDPを定めており、CMからもその構成要素のすべてに対応する専門科目を複数設けていることが確認できる。特に医学部保健学科については、専攻を問わず、「専門性」以外の構成要素についても非常に多くの専門科目が設けられているという点において、非常に模範的なCMであるといえる。残る経営学部と海洋政策科学部でも、「創造性」を除く構成要素に対応する学部のDPを定めており、CMからもその構成要素のすべてに対応する専門科目を設けていることが確認できる。ただし、経営学部では、「人間性」に対応するのは「初年次セミナー」と「高度教養科目」、「国際性」に対応するのは「高度教養科目」であり、特に「高度教養科目」については、授業科目名までは明記されていないという点には留意されたい。

3.1.2 「CMに基づく整理」では「ある」が、「第三者の判断」では「ない」タイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、法学部、経済学部、理学部、工学部、農学部である。このうち、法学部、経済学部、工学部（ただし、情報知能工学科を除く）では、CMからはDPの構成要素のすべてに対応する専門科目を設けていることが確認できるのだが、法学部では「人間性」と「国際性」について、経済学部では「専門性」を除く構成要素のすべてについて、学部のDPを定めていない（ように見受けられる）。なお、工学部では学科によって大きく異なるので表を参照されたい。また、農学部では、CMからは「創造性」を除く構成要素のすべてに対応する専門科目を設けていることが確認できるのだが、「国際性」については学部のDPを定めていない（ように見受けられる）。残る理学部では、「専門性」に加え「人間性」に対応する専門科目を設けていることが確認できるのだが、「人間性」については学部のDPを定めていない（ように見受けられる）。ただし、表からもわかるように、「人間性」に対応する専門科目は「生物学科」を除けば「高度教養科目」のみであり、それが専門科目としての位置づけにある科目でないのだとすれば、このタイプには該当しないことになる。なお、先述のように、仮に各学部のDPでは定めていなかったとしても、全学のDPで定める能力を、専門科目で身につけさせたいと考えている可能

性も十分にあるため、この不一致自体が問題でないことには留意されたい。むしろ、「一致していないように見える」ことが問題であることをここでは指摘しておきたい。この点は、後述のタイプも同様である。

3.1.3 「CMに基づく整理」では「ない」が、「第三者の判断」では「ある」タイプ

このタイプに該当するのは、先述のように、文学部、国際人間科学部、理学部である。まず、文学部では、DPの構成要素のすべてに対応する学部のDPを定めているのだが、CMからは「創造性」と「国際性」に対応する専門科目を設けていることが確認できない。先述のように、文学部では、DPの構成要素を示した上で、そこに位置づけられる(文学部の)DPを提示しているだけに、それに対応する専門科目を設けていない点に疑問が残る。また、国際人間科学部では、「創造性」を除く構成要素のすべてに対応する学部のDPを定めている(ように見受けられる)のだが、CMからは「国際性」に対応する専門科目を設けていることが確認できない。この点については、当該学部が「国際」を冠する学部であることが、「国際性」と「専門性」の切り分けを難しくしているものと考えられる。残る理学部では、「専門性」に加え「創造性」に対応する学部のDPを定めている(ように見受けられる)のだが、CMからは「創造性」に対応する専門科目を設けていることが確認できない。

3.2 DPの構成要素について各学部のCMで想定している能力

さて、ここまで、各学部のCMに記載されたDPの構成要素を手掛かりに論じてきたわけであるが、実は各学部のCMには、DPの構成要素のそれぞれについて「各学部が」想定している能力も記載されている。その「能力」から何がみえてくるのか、本項の最後に確認しておきたい。表3は、「専門性」を除くDPの構成要素のそれぞれについて「各学部が」想定している能力が、各学部のCMにおいてどのような文言で記載されているかを整理したものである。その記載内容が、全学のDPで定める能力の文言と完全に一致するものには濃い網掛けを、完全に一致はしないものの意味的には概ね同じものには薄い網掛けを施している。

この表からわかるように、「国際性」については、全学のDPで定める能力の文言と完全に一致する内容を記載している学部はごく一部に過ぎないものの、その他の学部も意味的には概ね同じ内容を記載している。一方、「人間性」と「創造性」については、全学のDPで定める能力の文言と完全に一致する内容を記載している学部がごく一部に過ぎないという点では同様であるが、その他の学部が意味的に概ね同じ内容を記載しているわけでは必ずしもなさそうであるという点で大きく異なっている。

表3 DPの構成要素について各学部のCMで想定している能力

		文学部	国際人間科学部	法学部	経済学部	経営学部	理学部	医学部医学科	医学部保健学科	工学部	農学部	海洋政策科学部
人間性	様々な場面において、状況を適切に把握し、主体的に判断する力					○						
	専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力					○						
	他の分野の人々と協働して課題解決にあたる能力	○			○		○		○	○	○	○
	他の分野の人々と協働して問題解決にあたる能力			○								
	自ら主体的に学修する態度とそれに必要な能力		○	○	○		○	○	○	○	○	○
	自ら主体的に学習する態度とそれに必要な能力	○										
	※専攻によって異なる能力を設定								○			
創造性	他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力					○						
	能動的に学び、新たな発想を生み出す力					○						
	複眼的に思考する能力	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
	問題解決のために、幅広い思考により新たな発想を生み出す能力			○								
	※学科・専攻によって異なる能力を設定								○	○		
国際性	複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力					○						
	異なる文化の人々と外国語で意思を通じ合える能力	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
	文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力					○						
	文化、思想、価値観の多様性を受容するとともに、多分野にまたがる地球的課題を理解する能力	○	○		○		○	○	○	○	○	○
	文化、思想、価値観の多様性を受容するとともに、他分野にまたがる地球課題を理解する能力			○								
	多様な価値観を尊重し、法的・政治的領域の課題を適切に把握する能力			○								
※学科・専攻によって異なる能力を設定								○	○			

すなわち、「人間性」については、多くの学部が「他の分野の人々と協働して課題（問題）解決にあたる能力」と記載しており、これは（全学のDPで定める能力の文言である）「専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力」と概ね同じ内容とみえなくもない。しかし、そのキーワードと考えられる「チームワーク力」がないという点に鑑みれば、概ね同じ内容を記載しているとも判断しがたい。また、ここで留意したいのは、（全学のDPで定める能力の文言である）「様々な場面において、状況を適切に把握し、主体的に判断する力」に対応する内容の記載がない（ように見受けられる）という点である。その一方で、ほとんどの学部は「自ら主体的に学修（学習）する態度とそれに必要な能力」と記載しているのだが、その共通点は「主体的」というキーワードのみであり、概ね同じ内容を記載していると判断することはできないだろう。なお、「自ら主体的に学修（学習）する態度とそれに必要な能力」が非常に重要であることは間違いないところであるが、この文言自体は、全学のDPはおろか、神戸スタンダードにも見当たらず、どこに由来するものなのかは定かではない。なお、神戸スタンダードとは、「教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力」と定義されるものである。その詳細については、後掲の近田論文、または本学のホームページ (<https://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/outline/general.html>) を参照いただきたい。

一方の「創造性」については、ほとんどの学部が「複眼的に思考する能力」と記載しているのだが、この「複眼的に思考する能力」というキーワードは、神戸スタンダードに掲げる3つの能力のひとつである。その能力は、「専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける」と説明されていることから、(全学のDPで定める能力の文言である)「他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力」と概ね同じ内容を記載しているとみえなくもない。しかし、「複眼的なものの見方」とは何を意味するのかが不明瞭である以上、概ね同じ内容を記載しているとも判断しがたい。また、ここで留意したいのは、(全学のDPで定める能力の文言である)「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」に対応する内容の記載がない(ように見受けられる)という点である。仮に「複眼的に思考する能力」に包含される能力として整理されているのだとすれば、先述の「複眼的に思考する能力」の説明内容からみても、さすがにその整理には無理があるだろう。

このように、DPの構成要素のそれぞれについて「各学部が」想定している能力と、全学のDPで定める能力とは必ずしも一致していない。特に「人間性」については「様々な場面において、状況を適切に把握し、主体的に判断する力」、「創造性」については「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」は、全学のDPで定める能力であるにもかかわらず、各学部のCMをみる限りそれらの能力は想定されていない。全学のDPで定める能力がいかに重視されていないかが顕著にうかがえる。

3.3 小括

以上、DPの構成要素と各学部のCMとの対応や、DPの構成要素について各学部のCMで想定している能力について確認してきた。ここで改めて指摘しておきたいのは、各学部のDPの記載内容とCMの記載内容が「一致していないようにみえる」ことの問題である。DPにせよCMにせよ、それが社会に対する「約束事」として示される性格のものである以上、この問題は看過されるべきではない。前節の小括で述べたことの繰り返しになるが、第三者にもわかりやすく誤解のないDPとすることは、今後のDPのあり方について考える際にまずもって重要なポイントであると考えられる。

4. 教育成果を問う評価項目の現状分析

さて、全学のDPにせよ、各学部のDPにせよ、そこにおいて身につけるべきとされている能力を学生が身につけているかどうかを評価することは、教育成果の可視化を通じた教学マネジメントを行う上で非常に重要な点である。その評価のためには、適切な評価項目による適切な調査を行わなければならない。

教育成果の評価方法は、直接評価と間接評価に大別される。直接評価は、測定されるべき能力について学生がその能力をどの程度有しているのかを第三者が評価するものであり、

間接評価は、測定されるべき能力について学生がその能力をどの程度有していると思っているのかを学生本人が評価するものである。

授業レベルにおける教育成果であれば、教育目標の射程が当該授業の中と狭く、測定されるべき能力が特定しやすいため、その成績をもって直接評価が可能であるが、カリキュラム／プログラムレベルにおける教育成果となるとそう簡単にはいかない。すなわち、それが特定の能力に関する教育成果であれば、教育目標の射程が限定されているため、例えば、英語の能力を付けることを目指すプログラムであれば、TOEIC や TOEFL のスコアをもって直接評価が可能である。しかし、それが学士課程全体の教育成果ということになると、教育目標の射程が大きく広がるとともに、複数の要素を含み込むことになるため、直接評価を行うことは非常に困難なものとなる。したがって、学士課程教育全体の教育成果の評価方法には、学生アンケートによる間接評価が用いられることが多い。なお、特定の教育成果の獲得に資する授業群の成績を重み付け等した上で算出された値をもって直接評価とすることもあるが、この点については次節にて言及する。

4.1 全学の DP に対応する評価項目

本学でも、学士課程教育全体の教育成果の評価方法には、学生アンケートによる間接評価が用いられている。全学的に行われているのが、半期終了ごとに実施される「学修の記録」（ただし、教育成果に関する評価項目が設けられているのは後期実施分のみ）と、卒業時に実施される「卒業時アンケート」である。表 4 は、それぞれの評価項目を示すとともに、それらが DP の構成要素及び神戸スタンダードのいずれに対応するかを、筆者が判断し、整理したものである。対応することが明らかなものには「◎」を、対応すると見受けられるものには「○」の記号を付している。なお、「DP の構成要素」の「DP1-1」～「DP3-2」は、全学の DP において「人間性」、「創造性」、「国際性」のそれぞれに 2 つずつ定める能力を意味している⁴。

この表からわかるように、「学修の記録」にせよ、「卒業時アンケート」にせよ、「DP の構成要素」との対応では「○」が付されることが多く、対応に漏れもある（対応していない項目がある）。すなわち、DP1-1 と DP2-2 は、全学の DP で定める能力であるにもかかわらず、全学の DP に対応する評価項目をみる限り、それらの能力は考慮されていないということである。なお、これらの能力は、前節で確認したように、各学部の CM において想定されていなかった能力である点には留意されたい。これに対して、「神戸スタンダード」

⁴ 「DP1-1」は「様々な場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力」、「DP1-2」は「専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力」、「DP2-1」は「他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力」、「DP2-2」は「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」、「DP3-1」は「複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力」、「DP3-2」は「文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力」を意味している。

との対応ではすべて「◎」が付されており、対応に漏れもない。これらのことから、本学における教育成果の評価項目は、全学の DP ではなく、神戸スタンダードを意識して作成されていることは明白である⁵。なお、本学における教育成果の評価項目が、神戸スタンダードを意識して作成されているにもかかわらず、全学の DP との接点があがりなりにもうかがえるという点には留意されたい。この点については本節末に言及する。

表4 「学修の記録」と「卒業時アンケート」の DP の構成要素等との対応

		DPの構成要素						神戸スタンダード			
		人間性		創造性		国際性		専門性	複眼的に思考する能力	多様性と地球的課題を理解する能力	協働して実践する能力
		DP 1-1	DP 1-2	DP 2-1	DP 2-2	DP 3-1	DP 3-2				
学修の記録	専門分野以外の学問分野についての基本的なものの考え方を身につけているか			○					◎		
	複眼的なものの見方をできるか								◎		
	世界の多様な文化、思想、価値観を受容しているか						◎			◎	
	地球規模の課題について理解しているか						◎			◎	
	専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力を身につけているか		◎								◎
	困難を乗り越え目標を追及し続ける能力を身につけているか										◎
	あなたは、【外国語の運用・表現能力】について、どの程度身につけていると思いますか						○				
	あなたは、【専門分野に関する深い知識・技能】について、どの程度身につけていると思いますか							◎			
卒業時アンケート	あなたは、学士課程において、【物事を複眼的に思考する能力】がどの程度身についたと思いますか								◎		
	あなたは、学士課程において、【多様性と地球的課題について理解する能力】がどの程度身についたと思いますか						○			◎	
	あなたは、学士課程において、【他者と協働して実践する能力】がどの程度身についたと思いますか		○								◎
	あなたは、学士課程において、【外国語の運用・表現能力】がどの程度身についたと思いますか						○				
	あなたは、学士課程において、【専門分野に関する深い知識・技能】がどの程度身についたと思いますか							◎			

⁵ 「学修の記録」の上から6項目と「卒業時アンケート」の上から3項目は、実質的には同じ内容である。すなわち、「学修の記録」では、神戸スタンダードに掲げる3つの能力を要素に分解した形で評価項目に落とし込んでいるのに対して、「卒業時アンケート」では、神戸スタンダードに掲げる3つの能力の名称が評価項目にそのまま用いられている。後者は学生にとって非常にわかりにくいものであることから、2022年度より「学修の記録」と概ね同様の評価項目に修正された。

以上のことから、本学における学士課程教育全体の教育成果の評価項目のあり方についての大きな問題点が指摘できる。すなわち、学士課程教育全体の教育成果の評価項目でありながら、DPの構成要素との対応が明確ではなく、むしろ神戸スタンダードとの対応が明確であるという点である。神戸スタンダードが教養教育で定める「神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力」であることに鑑みれば、それを教養教育の教育成果の評価項目とするならまだしも、学士課程教育全体の教育成果の評価項目とすることは問題であろう。DPは文字通り「学位授与に関する方針」として、本学がその達成を社会に約束していることであることに鑑みるならば、まずはDPの構成要素との対応が明確な評価項目を作成し、用いるべきだと考える。

DPの構成要素との対応を差し置いて、神戸スタンダードとの対応が明確な評価項目が作成され、用いられた背景には、各種調査に本学独自の教育成果の評価項目を設けようとするタイミングが、まさに神戸スタンダードを策定し、それに準拠する形でそれまでの全学DPが見直されるまでの時期にあたっていたことが関係していると考えられる。すなわち、「学修の記録」が実施されたのは2016年度から（当初から本学独自の教育成果の評価項目が設けられている）、「卒業時アンケート」（実施自体は2007年度から）に本学独自の教育成果の評価項目が設けられたのは2017年度からであるが、後掲の近田論文によれば、神戸スタンダードが策定されたのは2014～2015年度であり、全学DPの見直しが行われたのは2016～2019年度である。

このように、神戸スタンダードとの対応が明確な評価項目がいったん作成され、用いられてしまうと、しばらくしてそれまでの全学DPが見直されたからといって、それとの対応が明確な評価項目に修正するという機運にはなりにくかったであろうことは理解できる。しかし、一定期間が経過した現在、神戸スタンダードとの対応が明確な評価項目に固執する必要はあるまい。学士課程教育全体の教育成果の評価項目のあり方を見直す上では、DPの構成要素との対応が明確な評価項目を作成し、用いることは急務であると考えられる。

4.2 学部のDPに対応する評価項目

さて、ここで留意したいのは、前項までの話はあくまで全学のDPに対応する評価項目の話であり、学部のDPに対応する評価項目については別途考慮する必要があるという点である。すなわち、全学のDPにおいて身につけるべきとされている能力を学生が身につけているかどうかを評価するのが重要なことであるのは間違いないところである。しかし、特に「専門性」については、学部のDPにしか具体的に定めておらず、学部によっては、「専門性」以外の3つの構成要素についても全学のDPに上乘せする形で具体的に定めていることを考えると、学部のDPにおいて身につけるべきとされている能力を学生が身につけているかどうかを評価することは避けられない。それにもかかわらず、本学では、学部のDPに対応する評価項目を設けた調査がどのように実施されているのかさえ、必ずし

も捕捉できていなかった。

そこで、本学の全学評価・FD委員会を通じて、学部のDPに対応する評価項目を設けた調査がどのように実施されているかについて調査を行った。その結果をまとめたのが表5である。この表からわかるように、学部のDPに対応する評価項目を設けた調査はほとんどの学部(学科)で実施されてはいるものの、調査方法や実施頻度において必ずしも足並みがそろっているわけではない。すなわち、調査方法については、前項でみてきた「卒業時アンケート」に付加する形で実施している学部(学科)が大半ではあるものの、理学部と医学部保健学科のように「卒業時アンケート」以外の調査を用いている学部もある。また、表には示していないが、ほとんどの学部(学科)が(「卒業時アンケート」と同様に)教務システムを用いているのに対し、紙媒体を用いている学部(文学部)やGoogleフォームを用いている学部(工学部)もある。一方の実施頻度については、「毎年度設けている」学部(学科)が多いものの、「数年おきに設けている」学部(農学部)や「不定期に設けている」学部(文学部、法学部、医学部保健学科)もある。なお、「不定期に設けている」学部のうち、文学部は「数年おきに設ける予定である」ようであるが、法学部と医学部保健学科は「定期的に設ける予定はない」ようである。

表5 学部のDPに対応する評価項目を設けた調査の回答状況

		文学部	国際人間科学部	法学部	経済学部	経営学部	理学部	医学部 医学科	医学部 保健学科	工学部	農学部	海洋政策科学部	
卒業時アンケート	学部で独自に設定できる項目において、教育成果(ディプロマ・ポリシー等)の獲得状況を問う項目を設けていますか？	毎年度設けている		○		○	○		○				
		数年おきに設けている									○		
		不定期に設けている	○		○								
		設けたことがない						○	○				○
	学科等により異なる対応をしている												
	今後、学部で独自に設定できる項目において、教育成果(ディプロマ・ポリシー等)の獲得状況を問う項目を定期的に設ける予定はありますか？	毎年度設ける予定である(すでに毎年度設けている場合も含む)		○		○	○		○		○		
		数年おきに設ける予定である(すでに数年おきに設けている場合も含む)	○									○	
		定期的に設ける予定はない			○			○	○				○
学科等により異なる対応をしている													
卒業時アンケート以外の調査	学部で独自に設定できる項目において、教育成果(ディプロマ・ポリシー等)の獲得状況を問う項目を設けていますか？	毎年度設けている						○					
		数年おきに設けている											
		不定期に設けている							○				
		設けたことがない	○	○	○	○	○		○			○	○
	学科等により異なる対応をしている									○			
	今後、学部で独自に設定できる項目において、教育成果(ディプロマ・ポリシー等)の獲得状況を問う項目を定期的に設ける予定はありますか？	毎年度設ける予定である(すでに毎年度設けている場合も含む)						○					
		数年おきに設ける予定である(すでに数年おきに設けている場合も含む)											
		定期的に設ける予定はない	○	○	○	○	○		○	○		○	○
学科等により異なる対応をしている										○			

以上みてきたように、学部の DP に対応する評価項目を設けた調査は多くの学部で実施されてはいるものの、調査方法や実施頻度において必ずしも足並みがそろっているわけではない。各学部による自由度は担保しつつも、学部間で一定程度足並みを揃えておくことは、(全学レベルでの) 分析や調査にかかるコストを軽減できる可能性もあるため、学部の DP に対応する評価項目を設けた調査のあり方について検討していく必要がある。

4.3 小括

以上、全学の DP に対応する評価項目、学部の DP に対応する評価項目について確認してきた。ここで改めて指摘しておきたいのは、本学における教育成果の評価項目が、神戸スタンダードを意識して作成されているにもかかわらず、全学の DP との接点がまがりなりにもうかがえるという点である。その接点、すなわち、共通の要素を手掛かりに、全学の DP と神戸スタンダードを昇華させた新たな DP の策定の可能性がそこうかがえるのである。先人の熱い想いのもとで作られてきた神戸スタンダードをどのように昇華させるのかもまた、今後の DP のあり方について考える際の重要なポイントであると考えられる。

5. おわりに

以上、本稿では、本学における DP の現状について、各学部の DP、各学部の CM、教育成果を問う評価項目という 3 つの観点からアプローチしてきた。本稿の最後に、今後の DP のあり方について考える上での課題について指摘しておきたい。

まず、大きな課題として、DP の構成要素は大きく見直す必要がある。本学には DP が存在するにもかかわらず、それとは異なる神戸スタンダードが存在しており、特に教育成果の評価の局面では神戸スタンダードが意識されていることから、DP よりも神戸スタンダードの方が重視されてきたといっても過言ではないだろう。DP は文字通り「学位授与に関する方針」として、本学がその達成を社会に約束していることなのだから、神戸スタンダードを重視するあまり、DP をないがしろにすることがあってはなるまい。しかし、後掲の近田論文でみてきたように、神戸スタンダードが先人の熱い想いのもとで作られてきたものであることに鑑みるならば、DP を重視するあまり、神戸スタンダードをないがしろにすることもまた憚られるところであろう。前節で確認したように、DP の構成要素(正確には、全学の DP) と神戸スタンダードの間にはいくつかの「接点」が存在する。その接点、すなわち、共通の要素を手掛かりに、DP の構成要素と神戸スタンダードを昇華させた新たな DP の構成要素を策定することは十分可能であると考えられる。共通の要素は残しつつ、前者にあって後者にないもの、また、後者にあって前者にないものをどうするか、議論はそのあたりから始められそうである。

そうして新たな DP の構成要素が策定されれば、次に検討されるべき課題として、全学の DP と学部の DP との対応関係のあり方を大きく見直す必要がある。両者の現状の対応

関係は、「専門性」以外については、全学の DP で定める能力を前提とした上で、学部によってはそれに上乗せする形で定めているのだが、その対応関係は第三者には非常に不明瞭である。また、全学の DP で定める能力は、全学共通教育のみで身につけることが想定されているのか、学部専門教育を含む学士課程教育全体で身につけることが想定されているのかも非常に不明瞭である。その不明瞭さが、第3節で指摘したような、各学部の DP の記載内容と CM の記載内容が「一致していないように見える」問題の根源にある。DP にせよ CM にせよ、それが社会に対する「約束事」として示される性格のものである以上、第三者にもわかりやすく誤解のない DP とすることを目指さなければならない。

それではどうするべきか。まず整理すべきは、「全学の DP」という概念である。「全学の DP」は、「卒業あるいは修了までに、本学学生が、それぞれの課程を通じて身につけるべき能力」と定義されるが、「それぞれの課程を通じて身につけるべき能力」であれば、それは学部の DP と何がどう異なるのだろうか。せめて「それぞれの課程を通じて身につけるべき共通の能力（あるいは最低限の能力）」とすれば学部の DP との違いが少しわかりやすくなる。しかし、各学部の専門課程において「共通の能力」を担保することは事実上困難であることを考えれば、いっそ「教養課程を通じて身につけるべき共通の能力」とした方がわかりやすい⁶。このように、「教養課程を通じて身につけるべき共通の能力」として「全学の DP」という概念が整理できれば、学部の DP は、それへの上乗せを意識した上で、「当該学部の学士課程教育全体を通じて身につけるべき能力」を策定することが求められる。すなわち、DP の構成要素ごとに、「教養課程」における到達点をふまえた上で、「専門課程」ではどのような能力を身につけさせるべきかを検討する必要があるということである。なお、DP は「できる限り具体的に示すこと」が求められていることを申し添えておく。

そうして新たな DP の構成要素に基づく、全学の DP と学部の DP が策定されると、次なる課題として、それらで定めた能力を身につけさせるためにどのような（専門）科目を設ける（配する）のか、CP は勿論のこと、CM を大きく見直す必要がある。現状では、「専門性」を除く DP の構成要素に対応する専門科目を多く設けている学部は多くはないが、新たな DP の構成要素との対応においては、全学共通科目任せになりすぎないように、専門科目を一定程度設ける（配する）ことはぜひ意識したいところである。その点では、医学部保健学科の CM は非常に模範的であるため、ぜひ参照いただきたい。なお、後述する教育成果の評価方法の観点からいえば、ある特定の能力の伸長に、どの科目がどの程度寄与するのかを、いくつかのレベルに分けて考えておくことが望ましい。

ここまでの課題は、PDCA でいえば「P」、すなわち計画段階の課題にあたるわけであるが、その後の大きな課題として、PDCA でいえば「C」、すなわち評価段階の課題について考えなくてはならない。すなわち、新たな DP の構成要素に基づく、全学の DP、学部の DP

⁶ 神戸スタンダードは「教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力」と定義されているから、イメージとしてはその位置づけに近い。

で定めた能力をどのように評価するか、その評価方法について、直接評価も視野に検討する必要がある。前節では、学士課程教育全体の教育成果の評価方法には、学生アンケートによる間接評価が用いられることが多く、本学もその例外ではないことから、本学の現状について説明した。しかし、先述のように、特定の教育成果の獲得に資する授業群の成績を重み付け等した上で算出された値をもって直接評価とすることもある。特に近年では、学修成果の可視化が求められていることもあり、そうした値を教育成果の種類ごとにレーダーチャートのような形で示す大学も少なくない。本学においても、大学改革推進等補助金（デジタル活用教育高度化事業）「デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン」において採択された「LMSの高度化と学修データ統合システムによる学修者本位の教育の実現」という取組の一環でLAVISというシステムが試験的に構築され、学部のDPごとにその達成状況をレーダーチャートで視覚化できる仕様にはなっている⁷。しかし、DPの達成状況とされる値がどれだけ信頼できる値なのか、また、DPの達成状況を学生に提示することでどれだけの教育効果が見込めるのか、といった点についてはまったく不明である。そのため、実用化への道のりは近くはないのだが、その道のりをできるだけ近くするためにも、まずはその値がどれだけ信頼できるものなのか、特定学部（学科）に限定して検証を行うところから始めていくのがよいだろう。

これらの課題をすべてクリアするには、しばらく時間がかかるだろう。教職員の中にはそんな「お題目」に手間暇をかけても仕方がないと思う者も少なくないかもしれないが、ひとつひとつ丁寧に議論を重ねることで、本学におけるDPが「教育改革を実現する上でのもっとも重要な指針」として機能しうるようなDPに生まれ変わることを期待したい。

謝辞

本稿では、本学の全学評価・FD委員会を通じて行った、「卒業時アンケート」における学部で独自に設定できる項目についての調査の結果を使用させていただきました。調査にご協力いただいた教職員の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

近田政博（2023）「神戸スタンダード制定の経緯と意図ー全学ディプロマ・ポリシーとの関係に注目して」『大学教育研究』第31号、pp.25-43.

中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2016）『「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン』

⁷ 例えば、山形大学では「ディプロマサプリメント」において、また、広島大学では「詳述書」において、DPの達成状況をレーダーチャートで提示している。後掲の大山論文を参照されたい。

